

ポーと大岡昇平

MIYANAGA, Takashi / 宮永, 孝

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Society and labour / 社会労働研究

(巻 / Volume)

44

(号 / Number)

2

(開始ページ / Start Page)

40

(終了ページ / End Page)

58

(発行年 / Year)

1997-12

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00006953>

ポーと大岡昇平

宮 永 孝

昭和二十九（一九五四）年四月十九日の午後のことである。

瘦身に顔立ちの整った、中背の東洋人がひとり、ニューヘイブンのユニオン駅からニューヨーク行の列車に乗った。その東洋人は何を生業なりわいにしているのか、服装からだけでは皆目わからない。眼鏡をかけており、どことなく繊細な人間のような印象をあたえる。かれは客車の中に腰をおろすと、何の変哲もない車窓の風景に視線を投じた。

ニューヘイブンからニューヨークまではそんなに遠くない。約一〇〇キロの行程だから一時間半もあれば十分に着く。その東洋人とはたれであろう、二年前の昭和二十七（一九五二）年五月、秀作『野火』（創元社刊）によって読売文学賞を受けた新進作家大岡昇平（一九〇九〜八八）（当時四十五歳）であった。

かれは前年の十月、ロックフェラー財団の奨学金をうけて渡米し、ニューヘイブンの町にあるエール大学の研究生となった。表向きはフランス文学の研究——ことにスタンダールを仏文科主任教授のアンリ・ペールやブロンベール講師について修めることであった。が、当時、エール大学の図書館はティヴァン版『スタンダール全集』すらもたず、しかも新刊のスタンダール研究書となると、学生がしゅうちゅう借り出すので目にすることもまれであった。

車中、大岡は五カ月にもおよんだこの大学町での暮らしを思い起していた。ロックフェラー財団は、滞外期間の半分をアメリカで暮らすことを義務づけていたので、やむなくニューヘイブんに拠点をおき、この間大学図書館とリン

カーン街の下宿とを往復する生活をつづけたが、今ようやくそれにも別れを告げ、ほっとする思いがした。

四十を越えての外国暮らしはけっして楽なものではない。安い三流食堂の飯のまずさは全米どこへ行っても同じだが、かれの胃袋はそんなものを受けつけてくれぬ。いつも行きつけの安レストランの料理を眼の前になると、腹の底からゲップがこみ上げてくるような気がする。結局手をつけるのは、肉類を除いた添え物の野菜だけといったもので、それを胃におさめると、早々に退席する。

ニューヘイブンの暮らしが三ヶ月目に入った頃、ようやく気がついた。この町がスタンダールの研究にむかぬこと。下宿生活が快適なものであれば、他にもっと有意義な暮らし方もあったはずだと後悔は先に立たず、いろいろ悔やまれた。

大岡にとって、アメリカ文学のなかでいちばん興味があるのはエドガー・ポーである。英語の知識が十分であったなら、ふた月もあれば必要な知識を仕込むことにこと欠かないはずである。が、かれは英語に自信がない。

やがてニューヨークに着き、下宿に落ちつくると再びわびしい暮らしが始まった。某日、百十丁目の東洋物産店で味の素・醬油・麵類などを求め、さらに南カロライナ産の米なども購入し、自炊するようになった。

そのうちにロックフェラー財団の格別の配慮により、ポーにゆかりのあるバージニア州のリッチモンドやシャーロットヴィルの町を見学に訪れる旅費を得ることができたので、ある日のこと汽車にて南下することにした。

四月末のある日のこと、大岡は、ニューヨークのペンシルベニア駅から夜行寝台車に乗り、まずリッチモンドにむかうことにした。列車は翌朝、目的地に着くはずである。前夜十時半にニューヨークを発った汽車は、翌朝の九時半ごろ目ざすリッチモンドに着いた。

リッチモンドでは「ポー記念館」(図版1)、同館から二ブロック東の二十三丁目の角にあるポーの母エリザベスが

息を引きとった家（当時、取りこわし中）を見学し、さらにその日の午後、シャーロットツヴィル行の列車に乗った。眼に快いヴァージニア州の緑の野を見ているうちに、夜七時ごろシャーロットツヴィルに着き、早速安ホテルに旅装をといた。

同地では大学構内の「ポーの部屋」（図版Ⅱ）とジェファースンの家があるモンティチェルロを訪ね、さらにタクシーで「鋸山奇談」の舞台となった所を訪れると、シャーロットツヴィル一帯を俯瞰する高台に登り、あたりを見わたした。⁽¹⁾

大岡のポー巡礼の旅についてはこの辺でよすことにし、本題に戻らねばならない。

いったい大岡はいつ頃ポーの存在を知り、またどのような作品を読んだのであろうか。さらに八十余年の生涯において、相当数の作品を書き残したが、ポーの感化なり影響の痕跡を認めることが可能なのであろうか。

かれは少年時代から晩年に至るまで、和洋の書を相当読んだが、ことにポーとの最初の接触は、小学校六年から中学一年にかけてのことのようだ。かれはその当時にふりかえって、

ポーの「渦巻」（「メエルストロムに吞まれて——引用者）は僕の一番早い読書の中に入っていた。（多分中学一年の頃だったと思ふ。）感銘は大きく、その夜は眠れなかった。以来僕がずっとポーの影響裡にあったのは知っている。

スタンダールを読み出してから、ほかを顧みるひまはなかったのだが、小説を書くようになってから、自分の書くものに、ポーの影響が多いのに、自分で驚いていたのだ（作家の日記（一））『新潮』新年号所収、昭和33・1）。

『大岡昇平全集』第十五卷（中央公論社、昭和50・8）の巻尾に添えてある池田純益が執筆した「年譜」には、大

正九（一九二〇）年の暮ころ、当時、大岡は小学校六年生（十一歳）であったが、二級上の近所の友人石井太郎にシャーロック・ホームズ、アルサーヌ・ルパン等の作品を借り、「ポケット版のポー『メール・ストロームに吞まれて』を読んで強い感動を受ける」と記してある。

いったい大岡がポーと初めて出会ったきっかけを作った版本（訳書）は、どのようなものであったのか。

かれは大正四（一九一五）年四月、渋谷第一尋常高等小学校に入学以来、同十（一九二二）年四月、青山学院中等部に入學するまでの間、じつに多くの本を読んでおり、たとえば『立川文庫』にはじまり、雑誌『日本少年』『少年倶楽部』『赤い鳥』『おとぎの国』『金の国』をはじめ、翻訳物では『ガリバア旅行記』『アラビアン・ナイト』『ロビンソン・クルソー』などを愛読したほか、『海底軍艦』（押川春浪）『敵窟王』『噫無情』『幽霊塔』（黒岩涙香）や博文館刊の講談物『太閤記』『塩原多助』⁽²⁾などを読み、さらに中学に入ってからには芥川龍之介・志賀直哉・谷崎潤一郎・夏目漱石なども愛読した。

大正期には何点かポーの単独訳本が刊行されている。が、おそらく大岡が初めて読んだポーの訳本は、ポケット版の岡田実麿⁽³⁾訳『かぶと虫・渦巻・没落』世界短篇傑作叢書第一編（北文館、大正2・5）であろう（図版Ⅲ）。その後の大岡とポーとの関係は断続的のものであったと思えるが、成城高等学校を経て京大仏文科に進むにつれて、改めてポーを読むのである。

ポーを原文の英語で読むには語学的にも難があり、また英語の本の入手も容易でない⁽⁴⁾こともあって、かれはボードレールの仏訳で『アーサー・ゴートン・ピムの冒険』（Aventures d'Arthur Gordon Pym, par Edgar A. Poe）を読むのである⁽⁵⁾。時に大岡二十一歳、大学一年生のときのことであった。

その後、かれは邦訳でもこの長篇小説を読んだと思えるが、大岡自身「僕の記憶に間違いがなければ、このポー唯

一の長篇 (Arthur Gordon Pym) が翻訳されたのは、昭和になってからで、ちやちな春陽堂文庫本である」〔日記〕昭和32・11・17)と語っている。

かれのいう版本とは、岩田寿訳『ゴルドン・ピム物語』(春陽堂、昭和8・3)のことであろう(図版IV)。大岡は邦訳や仏訳でたしかにポーの作品に親しんでいたが、具体的にどのような作品を読んでいたかということになると、そのタイトルまで語ることは少なく、文献資料の上から明らかにするのは、「黄金虫」「メエルストロームに吞まれて」「アッシャー家の崩壊」(アッシャー・ゴードン・ピムの冒険)「陥穽と振子」などを読んでいたということである。

研究書としては、ニューヘイブンに滞在中の昭和二十八(一九五三)年の冬から翌二十九年の春にかけて、エール大学の図書館でフロイトの弟子マリー・ボナパルトが著した大著『エドガー・ポー』(図版V)(Marie Bonaparte: Edgar Poe, Étude psychanalytique, Ouvrage orné de vingt-sept illustrations, Avant-propos de Sigmund Freud vol. 1. 2, les Editions Denoël et Steele, Paris, 1933)を見だし、それを繙読し、のち昭和三十年代にパリの河岸の古本屋で求めたものを拾い読みしたと述べている。

また昭和三十二(一九五八)年秋に、丸善を通じて取り寄せたパトリック・F・クウイン著『エドガー・ポーのフランス的相貌』(図版VI)(Patrick F. Quinn: The French Face of Edgar Poe, Carbondale, Southern Illinois University Press, 1957)を愛読した。同書について、大岡はみづから「直ちに寝床の中で読み出す。平板なアメリカの学者の筆だが、別にポーの伝記もある模様でなかなかよく調べてある。ポーがアメリカより先にフランスで認められた事由として、ボードレールの翻訳が原文よりも明晰であったことなど、例をあげて説明してある。マリ・ボナパルトの『エドガー・ポー』を今日まで現われたポー評伝中、最良のものの一つとしているのは、わが意を得た」〔日記〕昭和32・11・16(17)と語っている。

大岡のポー発見に至るまでの軌跡は以上の通りであるが、こんどはポー受容（影響）へと視点を移してみたい。

大岡とポーとの文学的関係を考えると、大岡のポー愛読の出発点は、たまたま友人から借りた訳本であったわけであるが、やがて少年大岡はポーの世界に名状しがたい驚きと感動を覚え、無意識裡にひっぱり込まれて行った。

長じて再度ポーに親しみ、改めて感興をもよおすのだが、そのときも一愛好者に徹し、ポーを研究対象にしたり、かれから何かを学び取ろうといった意図を持ってはいなかった。

概して作家は自分の創作の秘密やネタを明かすことは珍しく、大岡も「自分の作品についてしゃべるのはあまり好きでないのです」と、講演会において語っている。けれどかれは比較的すなおに自分の作品の意図とか成立について語ったほうである。

『全集』を繙くと、ポーに関する言及も少なからず見られるが、大岡は創作するに際して、自分の人生体験、読んだ本からのイメージや文句、漠然とした物語の形式などを、時に意識的に、また時には無意識的に用いたようである。もしポーから何かを故意に借用したとしたり、それは模倣、作となつて現われるであろうし、無意識的であれば、それは影響の範ちゅうに入るのである。

大岡作品のなかでポーの世界が揺曳している代表的なものを挙げるとすれば、中編小説『野火』（創元社、昭和27・2）と長編小説『俘虜記』（創元社、昭和27・12）であろう。前者はルソン島において病氣（肺病）のために軍隊から追い出された一兵士が、熱帯の自然のなかを彷徨する話で、後者は一連の俘虜の記録をあつめた一種のオムニバス作品である。

作者によると、『野火』は昭和二十六（一九五二）年一月から八月まで『展望』に連載し、翌二十七年に単行本となったのだが、同作品の「全体のワクになっているのは、ポーの『ゴードン・ピム』という長編小説です」とみず

から語っている。さらに「漂流船の中の人肉食いがあります。くじ引きでだれかが死んでくわれることになるのですが、犠牲者は殺されると、すぐ手首、足首、つまり食えないところを打ち落とすというようなすこみのある細目があります。全体として、主人公がいろんな人と会ったり別れたりする筋立、最後に南極に流れて行くことになるのですけれども、南極の、当時はまだ南極大陸が発見されてなくて、海が大きな滝になって、地底にもぐり込んでいくというふうな、空想されていたのですけど、『野火』の終りが、幻想的な場面になってくるといふ構成も似ているわけです。特に意識してまねしたわけではなく、何となくそういうふうになって来たのですけど。」「傍点引用者」(『野火』におけるフランス文学の影響)。

大岡がこの引用文の中で述べている「すこみのある細目」とは、『野火』のなかの次の一節を指すものと思える。

「起てよ、いざ起て……」と声は歌った。私は起ち上った。これが私が他者により、動かされ出した初めである。

私は起き上り、屍体から離れた。離れる一歩一歩につれて、右手を握った左手の指は、一本一本離れて行った。中指、薬指、小指と離れて、人差指は親指と共に離れた。(二九 手)(傍点引用者)

作者の大岡が、「手首足首を打ち落とす等の細分はポーの『ゴードン・ピム』によっています。その切られた足首(手首の誤り?——引用者)の描写から始めたのが、僕の工夫ぐらいなものです」(『野火の意図』)と語っているものは、ポーの『アーサー・ゴードン・ピムの冒険』(第十二章)にある、「我々は犠牲者の血でもって、あの焼きつく様な渴きだけは幾らか醫やされた。手や、足や、頭は切り離して、内臓と一緒に海へ投げ込み、残りの身体は細かく切つて、その月の十七、十八、十九、二十の忘れられない四日間、食り食ったとだけ云へば十分だらう」(谷崎精二訳ポ

オ小説全集4『ゴアドン・ピムの物語』春陽堂書店)の描写を借用したということであろう。

このように『野火』全体の輪郭と細部に、ポーの影響があることをみずから認めている。大岡がこの作品を執筆するに際して力点を置いたのは、一兵士が彷徨中に出会う事件ではなくて、ひとりりで熱帯林を歩いていく人間の心理や極限状態に置かれた兵士の心理の混乱、身の回りの自然がどのようにかれの眼に写ったかを描くことであつたようだ。⁽¹¹⁾

しかもかれは執筆当時からポーをかなり意識し、ポーを意図的に利用する気が念頭にあつたようである。

ともあれ、『野火』は、「たといわれ死のかけの谷を歩むとも　ダビデ」といった銘句と共にはじまるが、これはポーの「影」のエピグラフを借りたといひ、さらに「詩篇」とすべきを「ダビデ」とした俗人趣味もポーのままです⁽¹²⁾。〔「野火」の意図〕と語っている。

大岡が、この作品の「書き出しはポーの『井戸と振子』(「陥穽と振子」のこと——引用者)を模しています⁽¹³⁾」と述べているものは、主人公が分隊長より追い出され、死の宣告にも似た病院行を命じられるアイディアをポーから借用したということか。

『野火』の冒頭部の一節に、「私は喋るにつれ濡れて来る相手の唇を見続けた。致命的な宣告を受けるのは私であるのに、何故彼がこれほど激昂しなければならぬか不明であるが、多分声を高めると共に、感情をつのらせる軍人の習性によるものであろう。情況が悪化して以来、彼等が軍人のマスクの下に隠さねばならなかつた不安は、我々兵士に向つて爆発するのが常であつた」(「一　出発」といったものがある)。

ポーの「陥穽と振子」は、トレドの宗教裁判所の暗黒の地下牢に閉じ込められている主人公が、死の宣告を受けたのち、絶望と希望、恐怖と歓喜を交互に味わい、最後に町に入城したフランス軍に救われる物語である。が、死の告

知者の表情を注視するくだりがある。

宣告——恐しい死刑の宣告——が私の耳に達した最後の明瞭な言葉であった。(中略)やがてもう私には何も聞こえなくなったから。しかし、暫くの間はまだ、私には眼が見えた、——が何といふ怖ろしい誇張を以て見えたことであらう！ 私には黒い法服を着た裁判官たちの唇が見えた。その唇はなく——今これらの言葉を書きつけている紙より真白に——それで怪奇なまでに薄く(……)。(佐々木直次郎訳「葬と振子」)。

すなわち、大岡とポーに共通するのは、死の宣言を受けたのち、死の告知者の表情、ことに相手の唇をみつめる描写である。

『野火』において、語り手の「私」が中隊から追われ、病院へ引き返してゆく過程で、熱帯の自然林の中をひとりで歩いてゆく場面がある。

これはドストエフスキーの『罪と罰』の主人公ラスコーリニコフの一人歩き、ネヴァ川の橋の上から夕焼けを見る場面を想い浮かべながら書いたと述べている。⁽¹⁴⁾

さらに「私」は本国に帰還後、東京郊外の精神病院の一室で、戦時中ルソン島での記憶を思い出そうとする。記憶が途切れたのはなぜか。それは山中でゲリラに後頭部を打たれ、意識を失ない、やがて米軍の捕虜になってしまうからである。大岡によると、その記憶の切れたところを想起しようとして、最後の幻想的部分が生れてくるが、ゲリラに不意に襲撃されるという段取りに似ているのは、ポーの『アーサー・ゴードン・ピムの冒険』というよりは、ドストエフスキーの『白痴』の場合から来ているということである。⁽¹⁵⁾

さらに語り手の主人公の、「私は棺の蓋を取り、私自身の死顔に眺め入った」(二三 夢)、「山の島の何本かの

芋に限られた私の生は、果して生きるに価するだろうか。しかし死もまた死ぬに値しないとすれば、私はやはり生きねばならぬ。少なくともあの芋のあるところまで、私が歩くのを止めるものはこの世にはない。私には私自身の足取りがよく見えた」(二〇 統)。

「死の観念は、私に家に帰ったような気軽さを与えた。どこへ行っても、何をしてみても、行手にきつとこれがあるところをみると、結局これが私の一番頼りになるものかも知れない。私は不意に心が軽く、力が湧くように思った。(……) この安易な感覚に伴って、一つの奇妙な感覚が生れて来た。私は自分の動作が、誰かに見られて、と思つた」(二五 光) といった言葉は、「死」を目前にした者の内省的傾向を示すものであり、同時に自分に好奇の眼を向けていることの現れと受けとれよう。

ポーの「メエルストロムの旋渦」にも同じような描写がみられ、船もろとも大渦に巻き込まれ、絶体絶命であるように思えたとき、自分を殺すことになる渦潮に好奇の念が湧き起ってくる。

私は、かうして死ぬのは何といふ素晴らしいことだらう、そして、神様の御力のこんな驚くべき示頭のことを思ふと、自分一箇の生命などといふ取るにも足らぬことを考へるのは何といふ莫迦げたことだらう、と考え始めました。この考へが心に浮んだ時、確か恥かしさで顔を赧らめたと思ひます。暫くたつと、渦巻そのものについての鋭い好奇心が強し心の中に起つて来ました。私は、自分の生命を犠牲にしようとも、その底を探ってみたいといふ願ひをはつきりと感じました」(佐々木直次郎訳「メエルストロムの旋渦」)

『野火』という作品は、「自分の無意識の中に残っている外国文学」の影響が複雑に交叉し、多要素の複合体なので

ある。この作品を書くにあたり、大岡は『罪と罰』の、特にラスコルニコフの独り歩きを読み返しました」といっている。しかし、ドストエフスキーから借りたのは調子、ただだという。

さらに「細部はポー、スチブンスンを下敷きにしています」といい、とくに『野火』の死を前にした人間に現われる「好奇心」は『メーラストロームに吞まれて』にあります。その他ポーからの借用は無数にあります」（『外国文学放浪記』『文芸』昭和27・8月号所収）。

大岡は後年、『野火』は無意識の部分の多い作品でした。それだけに未解決のまま残った部分が多い」と回想しているように、同作品においてポーの影響の痕跡を指摘し、それを取り出すことは容易ではない。それほどポーの感化なり影響はすっかりかれによって吸収同化されているからである。

合本『俘虜記』は、終戦の翌年昭和二十一（一九四六）年一月から十二月にかけて書かれたもので、およそ三部から成る。第一部は「捉まるまで」から「パロの陽」まで、第二部は「生きている俘虜」から「八月十日」まで、第三部は「新しい俘虜と古き俘虜」から「帰還」までである。⁽¹⁷⁾

この作品もじつはポーとは無縁ではないのである。大岡は『俘虜記』の自然描写は『宝島』と『黄金虫』から取りました⁽¹⁸⁾と述べている。が、一連の俘虜物を書くにあたってポーを意識し、何かを借用する気があったようだ。

大岡の「疎開日記」（昭和二十一年）には、少なからずポーに言及したくだりが見られるのである。たとえば、

「捉まるまで」——ポー的想像力に統制された彷徨記とすること。濁え。

アラン『芸術論集』——小説が告白だと書いてあるが、告白の書き方は書いていない。第二の自己を創り出すこと。自己を公衆に曝すのは危険であるから、ポーの小説の「私」の明智（明らかな知恵の意——引用者）を課する。（昭和21・4・27）

ショパンがバッハを研究したように、ポーを研究すること。(昭和21・4・29)

『俘虜記』はポー風にはならなかった。小林にはめられた。水彩画のような由。(昭和21・6・27)

「畑は暗紫色の段々をなし、色々な矩形を並べて、ずっと山の中腹まで続いていた」ポー風の数学的描写。(昭和21・12・2)

『女誠扇綺談』冒頭の描写はポーの援用がないと生きないのだが、ここへポーを引き合いに出すのは誤用である。(昭和21・12・6)

大岡は、『俘虜記』を「戦場の体験を出来るだけ理屈に合わせて、自分で納得が行くように」書いた、といい、さらに「ポー風の彷徨記とするつもりであったのですが、書いてるうちに、事実と個人的経験とが密着してしまつて、果さなかつたのでした」(『野火』の意図)と、創作に際しての意図を明らかにしている。

じっさい『俘虜記』にポーの影響の跡を捜すことはじつにむずかしいことなのである。「ポーと大岡昇平——『作家の日記』から」(『立教大学研究報告〈人文科学〉第二十三号』所収)を執筆した中里晴彦によれば、「もしあえてポー的な点を指摘するとすれば、それはポー風の「私」の知的な設定であろう。(中略)それ以外にポーの影響らしきものを発見することはむづかしい」と記している。

注

- (1) 「鋸山奇談」(『新潮』第六四五号、昭和34・1初出)。
- (2) 『大岡昇平全集15』所収の「年譜」(池田純益)を参照。四四六〜四四九ページ。
- (3) この訳者の生没年については定かではない。広島県甲奴郡上下町(宿場町)において、金穀貸附業・岡田胖十郎の長男とし

て生まれた。岡田家は上下町の名家であつたらしい。実磨は長じて同志社と慶応義塾にまなび、のちアメリカに留学した。

伊藤整の『日本文壇史8』（講談社文芸文庫）に、岡田実磨についてみじかい記述が見いだせる。それによると、かれは明治三十三（一九〇〇）年オハイオ州のオベリン大学に留学し、同三十五年から神戸高等商業学校の教授として英語を教え、のち第一高等学校の教授に転じたとある。伊藤整が岡田にふれたのは、その妹美知代（神戸女学院卒）が田山花袋の小説『蒲団』のモデルであつたからである。

筆者は岡田についてもっと知りたいと思つて、二十年ほど前に東大の教養学部事務所で調査をおこなつたことがあつた。旧制の第一高等学校の英語教授であつたことは知っていたが、それ以上のことを知りたかつたからである。一高の資料は未整理の部分も多く、調べるにはじつに苦勞した。

明治十九年から大正十四年までの二十七年間の『第一高等学校一覽』を調べたところ、明治四十一年に一高に奉職し、大正十二年に退職したことが判明した。教職員欄には次のような記載があつた。

英語

岡田実磨

米國オベリン大学

バチエロル、オフ、アーツ

広島 平民

結局、駒場の事務所で岡田の経歴について知りえたことはこれだけである。

大正二（一九一三）年にでた早大教授谷崎精二の『赤き死の仮面』（泰平館書店）が、大正期の「ボーの単独作品集」としては最初のものである。が、この谷崎訳に続くボーの単行本は、『かぶと虫・渦巻・没落』（北文館、大正2・5）などである。訳者の岡田については、くわしい調査が及ばなかつたが、知り合ひの元東大理学部教授は、

——わたしが中学生の頃、受験用の英語雑誌で名前を見たことがあります。

というから、英語教師時代に時には受験雑誌にも寄稿したもののか。その後、『向陵生活』にその風貌や人がらなどを伝える記事があることを知った。かれは一高の名物教授のひとりであったようだ。

一高の奇人・変人の筆頭は、なんといってもドイツ語の岩元禎教授（一八六九—一九四一、哲学者）だが、岡田は岩本とは違った意味で有名であった。かれは名は体を表すように、いかにも磨然とした美男子であったという。

真黒な美髯を蓄え、色は白く、ときどき教付などを着て教場に現れた。さすが本場アメリカで教育を受けただけあって英語の発音はよく、その訳も堂々としていた。その好みとした教材は、美しい恋物語などで、学生はホーンソンの『十二の言い古された話』の美文を見事に訳されると、恍惚として聞き惚れるほどであった。しかし、ロマンチックな性癖をもつこの教師は、ひじょうに皮肉屋で、意地の悪さといったら一高随一であったらしく、人望はあまりなかった（「何れも偉い先生ばかり」『向陵生活』所収、大正4年）。

「かぶと虫・渦巻・没落」は大正二年五月に上梓したものが、この訳本の「序言」に収録した短篇三篇についての解説が付いているので、それを次にひいてみよう。

本書に収めた三篇は、何れも、彼の天才の各方面を代表したものと認められた作品を採択した。乃ち「甲虫」はその円熟した構想力に於て、「渦巻」はその科学的想像の巧緻を極めた現実化的効果に於て、最後に「没落」は芸術的気分の活々とした描写力に於て、共に他の模倣すべからざる特種の天才を發揮した傑作である。

吾等は「没落」を読んで涯しなき荒廢の凄味を感じるごとく、「渦巻」を読んでその奇怪なる空想を現実であるかのやうに戦慄し、「甲虫」の不可思議なる暗号文を見ては構想の複雑にして而もいかにも自然なのに驚かされずにはいられない。

然りポーは凡る暗号文を読むことができた。彼は科学上の不可能事を想像によって可能と見せかけることができた又その芸術的筆致によって深刻なる感情の響を人の心に伝へる術を心得ていた。

岡田が編んだポーのこの訳本は、擬科学の物語「メルストロムに吞まれて」、死をテーマとした「アッシャー家の崩壊」、

探偵推理物の「黄金虫」など、各ジャンルの代表作を読者に提供したものである。訳出にあたっては、原作の精神や構文までも忠実に移そうとしたが、正確に訳そうとするあまり、こつこつとした訳文となった以外は原典の妙趣が写し出されていゝと百負している。ちなみにその岡田の訳技を「メヘルストロムに吞まれて」を例にとりて見てみよう。

A DESCENT INTO THE MAELSTROOM.

The ways of God in Nature, as in Providence, are not as *our* ways; nor are the models that we frame any way commensurate to the vastness, profundity, and unsearchableness of His works, *which have a depth in them greater than the well of Democritus.*

Joseph Glanville.

We had now reached the summit of the loftiest crag. For some minutes the old man seemed too much exhausted to speak.

"Not long ago," said he at length, "and I could have guided you on this route as well as the youngest of my sons; but, about three years past, there happened to me an event such as never happened before to mortal man—or at least such as no man ever survived to tell of—and the six hours of deadly terror which I then endured have broken me up body and soul. You suppose me a *very* old man—but I am not. It took less than a single day to change these hairs from a jetty black to white, to weaken my limbs, and to unstring my nerves, so that I tremble at the least exertion, and am frightened at a shadow. Do you know I can scarcely look over this little cliff without getting giddy?"

自然界に於て神のなし給ふところは「摂理」に於けるが如く、人間の為す所とは異れり。且つ、人間の作る模型は、デモクリタスの井戸よりも遙に深き、神の御業の偉大、深遠、不可思議なるに比ぶべくもあらず

私共は此時一等高い岩の絶頂に着いた。老人は疲れ過ぎて少時（しばらく―引用者）は口を利く元氣も無かつた。
だがとう／＼口を切つた

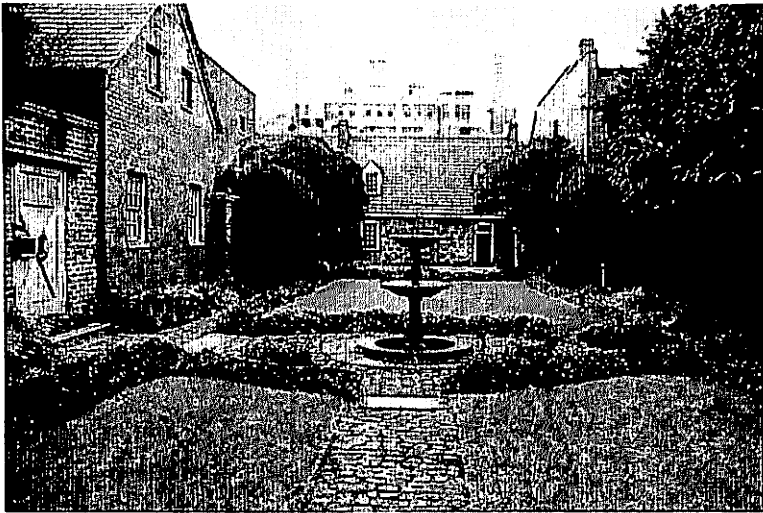
「これが昔なら私は貴君と同じやうに―等季子（末の子―引用者）の奴でも此処へ引張つて来れたでせうが、三年計り前に、今迄人間の経験した事も無いやうな出来事に遭遇して―とにかく活き残つてその話を為る者はとてもないやうな出来事にあつて―いやもうその時の大した恐ろしさと云つたら、たつた六時間の間に身体も心も全かり壊されて了ひましたのぢや。

貴君は私を余程の老人に思つて被^か在^らるでせう―けれども実は然^さうぢやありません。私はたゞの一日もかゝらんで真黒な髪を真白にされ、手足を弱め、神経を弛^{ゆる}めて、些^ち少^{せう}した力を出しても慄^{おそ}へたり、影を見ても怖^{おそ}つくやうになつたのです。この些^ち少^{せう}した崖から見下すのさへ、眩暈^{めまい}を為^なんぢや出来まいとは、よもや貴君もお思ひなさいますまい」

岡田訳はたくみにポーの原調を写しだしている。語学的にも正確だし、誤りを見いだすことはむずかしい。訳者は、職掌から英語に堪能であつたことは言うまでもないが、ポーの原意をよくつかんでいるという印象をあたえる。訳文も口語体で訳されており読みやすいが、今日から見れば、多少読みづらく感じられるかも知れない。何はともあれ、原作の味解力とその芸術的表現力においては、昭和期の佐々木直次郎に及ばないかもしれぬ。

(4) 「日記」(昭和32・11・17)

- (5) 注(2)の「年譜」を参照。
- (6) 訳者については不明。
- (7) 松村達雄訳。
- (8) 「日記」(昭和32・11・18付)。
- (9) 「野火におけるフランス文学の影響」。
- (10) 注(9)に同じ。
- (11) 注(9)を参照。
- (12) 「野火」の意図。
- (13) 「外国文学放浪記」
- (14) 注(9)に同じ。
- (15) 注(9)に同じ。
- (16) 注(9)に同じ。
- (17) 大岡昇平『俘虜記』(新潮社、吉田照生ヨシタ アキラの「解説」を参照)。
- (18) 注(13)に同じ。



ポー博物館の中庭（リッチモンド）
〔図版Ⅰ〕

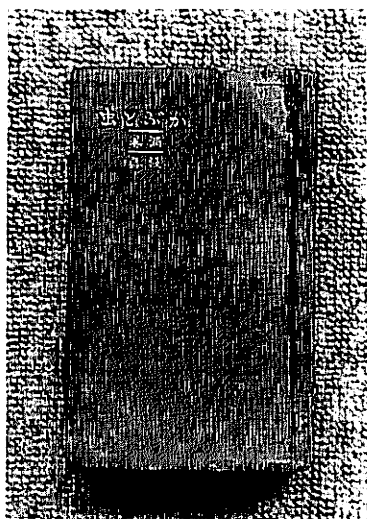


正面の部屋は、ウエスト・レンヂ13号（ポーの部屋）〔バージニア大学〕
〔図版Ⅱ〕



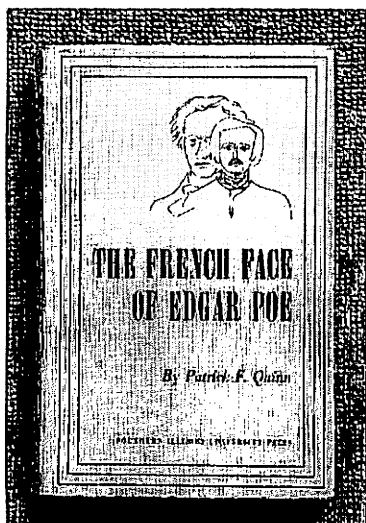
大岡が青年時代によんだと考えられるポアの訳本 [本の大きさは 10.4 cm×15 cm。筆者蔵]

【図版 IV】

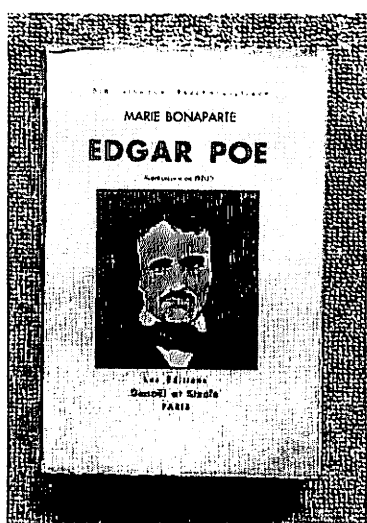


少年大岡にポーを知るきっかけをあたえたと考えられる訳本 [本の大きさは 15.2 cm×9.4 cm。筆者蔵]

【図版 III】



パトリック・F・クウイン著『エドガー・ポアのフランス的相貌』 [筆者蔵] 【図版 VI】



マリー・ボナパルトの仏訳『エドガー・ポア』 (原文はドイツ文) [筆者蔵] 【図版 V】